

印度哲学Ⅱ学期末課題

カリクレス

——観念の形成作用について——

所属	文学部哲学専攻 3 年
学籍番号	12000555
氏名	荒金 彰

この擬似的対話篇によって仏教の教理の一部を検討する。検討する教理は、快樂と正邪について論じられているプラトンの著作『ゴルギアス』における議論(491E-494E)と主題が重なると思われたため、かの作品に擬えて、その対話参加者であるポロス、カリクレス、ソクラテスを本篇に登場させた。なお本篇は、哲学倫理学特殊ⅡM2022 年度期末課題「カリクレス——戦いについて——」の前篇としても考案された。対話形式で記した理由は、論証の段階を明確にするとともに、論証に不備があった場合にはその箇所を後から発見し特定しやすいようにするためである。

擬ソクラテス 「カリクレス、君には、世界にあるいは自分に生じるあらゆる問題の根本原因を究明し、これを解決することが、君にとって重大なことであると思われませんか。」

擬カリクレス 「私はそのことを、私にとって重大なことであると思います。」

擬ソクラテス 「君にとって重大なことであれば、またそのことは、それが君にとっていかに難題であろうとも、君の力の及ぶ限り追求するに値するのではないか。」

擬カリクレス 「その通りです。」

擬ソクラテス 「また言論や問答、ないし瞑想といったものが、その追求手段として決してつまらないものではないと思われませんか。君はこれに勝る追求手段を何か挙げることができるか。それとも、このことに関する知識は人間が触れることのできないものであって、我々は神々がそれを賜るのを待つばかりであろうか。」

擬カリクレス 「いいえ、ソクラテス、仮にその知識が人間の手の届かないところにあったとしても、良きものを望み求める人々の心を、神々は決して厭われることはないでしょう。そればかりか、きっと助け導きさえするでしょう。」

擬ソクラテス 「それでは、差し当たって我々にできることは、神のご加護を祈りつつ、この言論を立派に遂げることはないか。」

擬カリクレス 「はい。」

擬ソクラテス 「それでは、カリクレスよ、目前に何か問題が発生しており、人がこれを解決せねばならないというときに、二通りの方法が考えられるのではないか。すなわち、(A)何か不足しているもので新しく必要なものを付け加えるという方法と、(B)何か過剰であり旧来からの不要なものを取り除くという方法とがありうるのではないか。」

擬カリクレス 「例えばどのような場合のことを言っているのでしょうか。」

擬ソクラテス 「例えば、ある人の目前に不幸が生じているとしよう。ところで、不幸はいかなるときに生じるものであったらだろうか。カリクレスよ、君には、不幸が、各人が欲しているもの（これは分母に相当する）に対して、各人に与えられているもの（これは分子に相当する）が少ないときに、生じるものであると思われませんか。」

$$h = \frac{g}{n} \quad h: \text{幸福度} = \frac{g: \text{各人に与えられているもの}}{n: \text{各人が欲している/必要としているもの}}$$

擬カリクレス 「私にはそのように思われます。」

擬ソクラテス 「さらに、幸福度 $h < 1$ のとき、すなわち、当人の欲している/必要としているものが当人に与えられているものよりも超過していることが、その人が不幸であることと同義である——このように想定することは、事柄を完全に記述するとは言えないまでも、差し当たりの定式化として決して悪いものではないのではないか。」

擬カリクレス 「はい。」

擬ソクラテス 「また、幸福度 $h \geq 1$ のとき、すなわち当人に与えられているものが当人の欲している/必要としているものと同等であるまたはそれを超過していることが、その人が幸福であることと同義である——このように想定することも、同様に、事柄を完全に記述するとは言えないまでも、差し当たりの定式化として決して悪いものではないだろう。」

擬カリクレス 「はい、決して荒唐無稽なものではないと思われます、最初のものとしては。」

擬ソクラテス 「さて、先に言われたことから次のことも帰結するのではないか：（１）当人に与えられているものが多ければ多いほど、その人はより容易に幸福になりうる。また、（２）当人の欲している/必要としているものが少なければ少ないほど、その人はより容易に幸福になりうる。」

擬カリクレス 「はい、そのように言うことができます。」

擬ソクラテス 「また、その逆も然りではないか：（３）当人に与えられているものが少なければ少ないほど、その人はより容易に不幸になりうる。また、（４）当人の欲している/必要としているものが多ければ多いほど、その人はより容易に不幸になりうる。」

擬カリクレス 「同様に、そのようになるでしょう。」

擬ソクラテス 「ここで、冒頭で挙げられた主張に立ち返ってみることにしよう。最初に示されたのは、『問題を解決するには（Ａ）何か不足しているもので新しく必要なものを付け加えるという方法と、（Ｂ）何か過剰であり旧来からの不要なものを取り除くという方法とがある』ということであった。」

擬カリクレス 「そうでした。」

擬ソクラテス 「この場合、（Ａ）の考えに注目する者は、（１）や（３）の事情にも注目するし、また、（Ｂ）の考えに注目する者は、（２）や（４）の事情にも注目するのではないか。」

擬カリクレス 「よく分かりません。」

擬ソクラテス 「このことは、より平易に表現すると、次のように換言できるだろう：私には何か不足していて、今私が持っていない何か新たに必要とされるものを獲得するならば問題が解決される、と普段から考える者は、何か不幸を解決して幸福になりたいと思うとき、より多くのものを獲得すればより幸福になり、より少ないものを獲得すれば不幸になると考えるであろう。これに対して、私には何か過剰であって、今私が持っている何か古くから不要とされるものを放棄するならば問題が解決される、と普段から考える者は、何か不幸を解決して幸福になりたいと思うとき、より多くのものを欲せば/必要とすれば不幸になり、より少ないものを欲せば/必要とすれば幸福になると考えるであろう。」

擬カリクレス 「そのように言ってくざると、おっしゃる内容が理解できます。」

擬ソクラテス 「ところで、以上言われた内容を整理すると次のようになる。人が不幸な状態にありながら幸福を望むとき、可能な方法（道）は二つある：欲するもの/必要とするものを増やすか、または欲するという思い/必要とする在り方を減らすかのいずれかである。それとも、これ以外の方法を君は何か思いつくだろうか。」

擬カリクレス 「今のところは思いつきません。」

擬ソクラテス 「また、人が不幸な状態にあるとすれば、その可能な原因は二つある：欲するもの/必要とするものの不足か、または欲するという思い/必要とする在り方の過剰かのいずれかである。それとも、これ以外の原因を君は何か挙げることができるだろうか。」

擬カリクレス 「今のところは挙げるできません。」

擬ソクラテス 「ところで我々人間一般は——生まれつきによるのと、また育つ過程において周囲からそのように教え込まれることによるのとの、どちらにもよるのかもしれない——一方の方法ないし原因にはよく関心が向くけれども、他方のものどもには向いていないのではないか。」

擬カリクレス 「それはつまり、どのようなことを言われているのですか。」

擬ソクラテス 「つまり、我々は何か財産なり友人なり嗜好品なり各々が愛着するものなり、何か私を幸福にしてくれると思しきものを欲し、必要とし、獲得し、それらを不断に増大させること——すなわち欲求充足——については関心が向いていて、その欲求充足を完遂する技能も熟達している。また、それらを獲得するための生得的技能（例えば諸器官が有する食物を口に運び消化する技能）なり後天的技能（例えば財産の保守及び獲得のための策謀の技術あるいは合意形成のための言論の技術）なりを、全く持っていなかったり支障ある仕方ではしか持っていなかったりすることが、ひどい不幸であると考えられている。しかし一方で、そういったもの——財産、友人、嗜好品なり各々が愛するもの——を欲したり必要としたりするという、不幸の一方の原因となっている我々の側の過剰な性質、その性質自体を放棄したり軽減したりする技能については元来関心が向いておらず、ことに節制に関する技能となれば、人為的な教育や意識的な自己吟味に長い期間従事することを通じてでしか、熟達しないのではないか。」

擬カリクレス 「そのようです。」

擬ソクラテス 「そして、人々は節制の技能を持っていなかったり瑕疵ある仕方ではしか持っていなかったりすることを大きな不幸とは思わないのではないか。」

擬カリクレス 「そのようなことを大きな不幸と考える人は少数でしょう。」

擬ソクラテス 「また、このような節制に関する訓練に励む修行者を見ると、時に人々は『彼らは欲望を充足させるための十分な技能を持たないゆえにそのようなことを行っているのだ』と考え、彼らをお人好しの不器用な連中と呼んで揶揄し、あるいは偽善者と呼んで誇るばかりか、苦行者と呼んで哀れみさえするだろう。人々のこの考えが起こるのは、人々が何か持っていないものを獲得する技能には関心があるけれども、何か持っているものを放棄する技能には関心がないことを示していると言えるのではないか。」

擬カリクレス 「そのようなことは大いにあると言えるでしょう。しかしソクラテス、人々がそのような考えるのは、幸福に至る方法が二種類あることや、不幸の原因が二種類あることが分からないからではないと思われます——それらのことはもう嫌というほど十分に言われました——。むしろ、そのどちらの方法がより優れたものであり、どちらの原因がより重大なものであるかが、今まで立派に言われなかったから、人々は依然として獲得の技能が放棄の技能よりも重要であると考えてるのでしょう。」

擬ソクラテス 「カリクレスよ、君の言うことはおそらく本当で、それは重大な問題であって、答えるのが容易ではない問題なのだろう、と私には思われる。ともかく、今この時点で、『ここに来て、古の人によって語られた言葉が真理であったことが明らかになったのだ。つまり——幸福になるために多くのものを必要とする人はより悪い状態にある一方で、より優れた人は幸福になるためにより少ないものを必要とする——という言葉が真理であったことが。』と高らかに宣言することが不適當であるのは確かである。

擬カリクレス 「どうやらそのようですね。」

...

擬ソクラテス 「苦痛をもたらすものは優れたものであると言えるだろうか。」

擬ポロス 「いいえ、むしろ苦痛をもたらすものは悪であり、我々にとって問題であり、克服すべきものであると思われます。」

擬ソクラテス 「ところで、苦は何らかの戦いによってもたらされるものであり、戦い以外によってもたらされないのではないか。ただし、私の言う戦いとは、人間同士の争いのことだけではない。人間と動物が戦う狩猟や殺生などの場合にも、殺生される方に苦痛が生じる。動物の身体が微細生物や過酷な環境と戦うときに、それは動物にとって病、すなわち苦痛と理解されるであろう。つまり、生命の、自己を維持させるための一連の円環運動同士の衝突、これを戦いと呼ぶ。」

擬カリクレス 「いや、ある人はこのように主張するでしょう、苦痛をもたらすものこそが優れたものである、と。彼らは戦いこそが万物を生かすものであると主張します。なぜなら、我々の身体を生かす

のは運動と生成変化であって、停止はすなわち死を意味するからです。彼らのような考えを持つ人々を、今我々の間で言われたことだけを以てしては、説き伏せることができません。」

擬ソクラテス 「あなたの言うことは本当だ。しかし苦痛をもたらすものは、苦痛をもたらすゆえに優れているのではなく、それが何らかの優れたものをもたらすゆえに優れているのだろう。そして仮に身体活動が優れたものであるなら、その身体活動をもたらす生成変化は優れたものであり、その停止は悪であろう。ところが身体活動が優れたものであるという主張は、どこから出てくるのだろうか。このことを、世間的一般通念や思惑などの”それらしさ”によるのではなく、確実な論証によって証明した者が、誰かいるだろうか。」

擬ソクラテス 「また、身体のあらゆる感覚器官は、生成変化を捉える。なぜなら諸感覚は生成変化の影響を受けるから。一方で思惟によって捉えられる抽象観念は生成変化しない。ところで生成変化しないものこそ真にあるものと呼べるのではないか。この辺りの問題については、また別の機会に検討してみよう。」

擬ソクラテス 「さて、先の話に戻ろう。ヘラクレイトスの説によれば、万物はたとえそれが静止して平静でいるかのように見えても、内部では戦いに満ちている、ということであった。戦いは、運動によってもたらされるし、運動によってもたらされない戦いはない。戦いとは自己維持のための円環運動同士の衝突のことであると先ほど定義したが、自己維持のための円環運動とはまさに一種の運動であるから。」

擬ソクラテス 「ところで先に、幸福に至る可能な方法として、未所有の諸技能の獲得と既所有の諸技能の放棄とがあることが言われたが、ブッダと呼ばれる東方の古の賢者の学派にある人々が言っているのが、後者の方法の系統に連なるものであるらしい。つまり、『憤怒を除去し、愛着から離れよ』『同等、劣等、優等を想定してはならない』『見解を想定してはならない、命題に執着してはならない、そのような人々は論争を乗り越えることがない』といった説がどれも、この後者の方法に集約されるように思える。」

擬カリクレス 「どうしてそのように考えることができるのでしょうか、説明してください。」

擬ソクラテス 「彼らの説は、『あるもの、あらぬもの、これら確かな真理の道にあるもののみを想定せよ。あったもの（過去）あるであろうもの（未来）なるもの（生成）ならぬもの（消滅）は不確かな思惑の道にあるから、これを想定してはならない。』というパルメニデスの説とも決して遠くはないように思う。というのも、ブッダの門下にある人々が『過去・未来、それらのものを想定するから心配が生ずる。そのようなものを想定する人間の技能、すなわち想念・諸行を捨てよ。』といった意味のことを説いているからだ。つまり、憤怒、愛着、見解の想定、これら全てが、人間の想念・諸行を可能にする技能から出たものであって、かの学派が説いているのは、これら諸技能の放棄に他ならないということである。」

擬ソクラテス 「また『無我の境地』も、先の「既所有の諸技能の放棄」が最も推し進められたところの極限にあるのではないか。つまり「我」という技能までもが不幸の原因であるから、「我」を消してしまえと彼らは言っているのではないか。ただしここで言われている我とは、私の身体や私の意識のことではなく、“私が私である”と思う想念・諸行のことであるのだが。…しかしこの言論は何か困難なものを伴ったもののように思える、言葉にしようとするところのものを言葉にしたときに、すでにそれはもとのものではなくなっているという懸念が拭えない。」

擬カリクレス 「我が一種の技能である、というのがわかりません。」

擬ソクラテス 「我によって人は自己同一性を想定し、さまざまなものを我のもとに接続させる形で、所有関係や隷属関係といったものを想定し、社会が成り立ってゆくことができるという、このような言説を君は聞いたことがないか。このときの我というのが、それらの関係や社会制度を可能にする技能の一種であり、まさにブッダの説で問題となっているあの我と同じものであるであると私には見える。」

擬カリクレス 「彼らは『思いを停止せよ』とも言っています。また一方で『精進せよ』とも言っています。このことはどのようにして理解したらよいのでしょうか。というのも私には、思考を停止するときに精進することはできず、精進するときに思考を停止することができないように思われるからです。」

擬ポロス 「思いを停止すると何が見えなくなる、とあなたは言うのでしょうか、カリクレス。」

擬カリクレス 「問題が見えなくなります。」

擬ポロス 「問題が見えなくなったからといって問題が解決されたというのでしょうか。世にもまれな賢人であるとされているブッダが、そのようなことを言うとは思えません。」

擬カリクレス 「それならば、何か賢人の言葉を別様に解釈しなければなりません。」

擬ソクラテス 「ひとつこういった解釈を検討してみてもどうか。すなわち、『我の存在が苦であるのは、それが世界/宇宙秩序の回転運動に争っているからではないか』、というものである。世界あるいは宇宙全体で行われている生命の回転運動と、我において行われている生命の回転運動とを、一致させること。世界に抗って何か私的な思いを強めて生きることを辞めること、これこそ彼が説いた最大の平安、すなわち解脱への方法ではなかろうか。というのも、苦痛をもたらす争いとは、ある生命の円環運動と他の生命の円環運動との衝突であると、先ほど我々の考えは至ったのだから。『ātman = brahman』が意味しているのも、何かこの種の円環運動の一致に関連することではないだろうか。」

擬カリクレス 「『汝自身を知れ』との言葉は我々の間では古くから言われてきましたが、これとも何か関係があるかもしれません。」

擬ソクラテス 「となると、冒頭（5段目の台詞）で我々が同意したこと『言論や問答、ないし瞑想といったものが、その追求手段として決してつまらないものではない』ということにも、もしかすると検討の余地が残されているのかもしれない。」

擬カリクレス 「そのことは、『思いを停止せよ』という言葉の極意を知るまでは、決定できぬ事柄のように思います。」

擬ポロス 「我々には、このことを検討するのに十分な時間が必要でしょう。」

擬ソクラテス 「心配することはない、時間ならたくさんある。時間は、我々が何か党派や集団組織の争いごとのために使えば一瞬で尽きてしまうが、我々が自己吟味や思索的探求のために使えば、真理の全てをことごとく把握するという境地にまでは至らずとも、多くの喜びを我々にもたらしてくれるだけの境地に到達するには、きっと十分だろう。それに愛知者という言葉には、争いや喧騒を好むのではなく、知を好むと言う意味があるではないか。」